

伊坂窯跡・伊坂遺跡(第5次)発掘調査報告  
—四日市市伊坂町—

2011(平成23)年

三重県埋蔵文化財センター



卷頭図版 1 伊坂窯跡①



1次窯体



卷頭図版2 伊坂窯跡②



最終窯体



卷頭図版3 伊坂窯跡③



調査区全景（南西から）



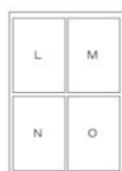
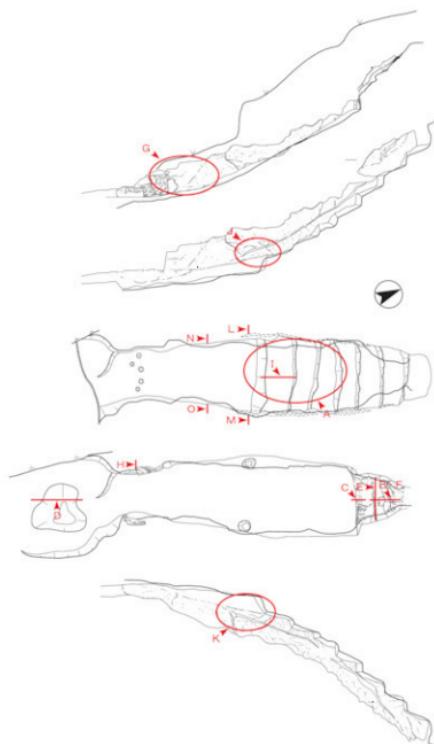
最終窯体半裁状況



遺構全景（上空から）



出土平瓦



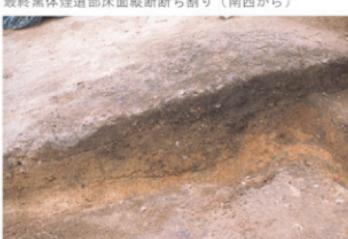
卷頭図版 4

卷頭図版 5

卷頭図版 6

細部写真撮影箇所

卷頭図版4 伊坂窯跡④





卷頭図版5 伊坂窯跡⑤



焼成部西側壁被熱状況



西袖横断断ち割り（南から）



1-II 次窯体焼成部床面縦断ち割り（南西から）



西側壁改修痕跡段



東側壁改修痕跡段



卷頭図版6 伊坂窯跡⑥



西侧壁改修痕跡段断ち割り



東側壁改修痕跡段断ち割り



燃焼部西侧壁断ち割り



燃焼部東側壁断ち割り



卷頭図版 7 伊坂遺跡①



伊坂遺跡遠景（北西上空から）



S H507 (北から)



S B508 (北東から)



卷頭図版 8 伊坂遺跡②



S H509出土石杵



S H509出土石杵赤色顔料付着部分



## 序

妹に恋ひ 吾の松原 見わたせば 潮干の湯に 鶴鳴き渡る (万葉集 卷六)

聖武天皇が朝明の行宮で詠じたとされる一首です。

朝明川の河口付近の海岸には、少なくなりましたが、今もなお、松原が点在しております。さすがに鶴は見られなくなりましたが、人々の暮らしは絶えることなく、現代にまで続いております。残念ながら、天皇とは異なり、この朝明の地に暮らした一般の人々の様子は、文字として記録されることはほとんどありませんでした。しかし、人々の暮らしの痕跡が、全く消えてしまったわけではありません。今もなお、朝明川のほとりの山野に人知れず眠っているものが沢山あるようです。

このたび、新名神高速道路の建設に伴い、伊坂窯跡と伊坂遺跡の発掘調査を行いました。伊坂窯跡は、奈良時代の窯窪であり、伊坂遺跡は古墳時代の集落跡であることが確認されました。これまで知られることのなかった朝明の人々の「あしあと」を、今回の調査で、またひとつ明らかにすることが出来ました。

両遺跡の調査区は道路建設により姿を消しますが、この発掘調査の成果が豊かで厚みのある地域史把握のための一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査の実施にあたっては、地元にお住まいの皆様をはじめ、中日本高速道路株式会社、四日市市教育委員会など関係諸機関からご理解とご協力を賜りましたことに厚くお礼申し上げます。

平成23年3月

三重県埋蔵文化財センター

所長 河北秀実

## 例　　言

- 1 本書は、三重県四日市市伊坂町に所在する伊坂窯跡と伊坂遺跡（第5次）の発掘調査報告書である。
- 2 両遺跡の発掘調査は、近畿自動車道名古屋神戸線（四日市JCT～亀山西JCT）建設事業に伴う緊急発掘調査である。調査にかかる費用は中日本高速道路株式会社が全額負担した。
- 3 伊坂窯跡は、当初、「伊坂遺跡東地区②」として現地調査を行った。しかしながら、窯跡とそれに関連する遺構のみしか確認できなかつたため、調査終了後に同地区を、新発見の「伊坂窯跡」として遺跡登録を行つた。本書ではすべて「伊坂窯跡」の名称で報告した（第1章第3節参照）。
- 4 調査は、下記の体制で実施した。
- 委託者 中日本高速道路株式会社  
受託者 三重県  
調査主体 三重県教育委員会
- [平成20年度]
- 調査担当 三重県埋蔵文化財センター 調査研究Ⅱ課  
主査 船越重伸 技師 石井智大  
現地作業 有限会社 中浦土木  
遺跡名・面積 伊坂窯跡 558m<sup>2</sup>  
伊坂遺跡（平成20年度第1次調査） 42m<sup>2</sup>  
調査期間 平成20年12月17日～平成21年3月13日  
平成21年3月16日～平成21年3月19日
- [平成21年度]
- 調査担当 三重県埋蔵文化財センター 調査研究Ⅱ課  
主査 小瀬 学 技師 萩原義彦 主事 勝山孝文  
現地作業 株式会社 烏田組  
遺跡名・面積 伊坂遺跡（第5次） 2,870m<sup>2</sup>  
調査期間 平成21年6月8日～平成21年12月9日
- 5 本書の執筆は、石井智大・勝山孝文・川部浩司・櫻井拓馬が分担した。遺構の撮影は各調査担当者が行い、遺物の撮影は、石井智大・勝山孝文・川部浩司・杉野直也・萩原義彦が分担した。全体の編集は石井が行なつた。なお、文責は各節の文末に記載している。
- 6 発掘調査及び本書の作成に際しては、地元の方々をはじめ、下記の方々や機関等にご指導やご協力を賜った。記して感謝の意を表したい。宇佐見亜紀、尾野善裕、梶原義実、齊藤理、藤澤良祐、和氣清章、朝日町歴史博物館、四日市市教育委員会（敬称略）。
- 7 本書が扱う発掘調査の資料並びに出土遺物等は、三重県埋蔵文化財センターが保管している。ご活用願いたい。

## 凡　　例

- 1 本書では、国土地理院発行の1:25,000地形図「菰野」「桑名」、四日市市発行の1:2,500都市計画図などの地図類を用いている。
- 2 本書で示す方位はすべて座標北で示している。なお、これまでの調査の経緯から、伊坂窯跡では世界測地系、伊坂遺跡では日本測地系を用いている（詳細は各遺跡の「調査の方法」を参照）。
- 3 本書で用いた土色は、小山正忠・竹原秀雄（編）『新版 標準土色帖』（1967初版）日本色研事業株式会社に拠る。
- 4 本書では、以下のように遺構の略記号を使用している。  
S H : 壁穴住居 S B : 掘立柱建物 S K : 土坑 S D : 溝 S F : 窯跡・焼土坑  
S Z : 落ち込み P it : ピット・柱穴
- 5 遺物実測図の縮尺は基本的に1/4としているが、鉄製品など一部の小型遺物については1/2としている。これらの縮尺は図中のスケールにて明示している。
- 6 遺物一覧表の凡例については、一覧表の冒頭に記載している。
- 7 写真図版中の遺物に付した番号は、各遺物の報告番号と対応している。なお、遺物写真の縮尺は不同である。

# 目 次

第Ⅰ章 前言	1
第1節 原因事業の概要	1
第2節 調査に至る経緯	2
第3節 伊坂遺跡の調査次数と窯跡の名称について	5
第4節 文化財保護法等にかかる諸通知	6
第5節 調査の経過	6
第Ⅱ章 位置と周辺の環境	9
第1節 地理的環境	9
第2節 歴史的環境	11
第Ⅲ章 伊坂窯跡	14
第1節 調査の方法と遺跡・遺構等の名称	14
第2節 1次窯体	17
第3節 2次窯体・最終窯体	26
第4節 灰原	32
第5節 窯体の変遷	33
第6節 作業場関連遺構	39
第7節 出土遺物	43
第8節 小結	96
第Ⅳ章 伊坂遺跡（第5次）	98
第1節 調査の方法	98
第2節 遺構	100
第3節 出土遺物	105
第4節 小結	106
第Ⅴ章 自然科学分析	108
第1節 分析の目的と試料	108
第2節 伊坂窯跡の草本植物の放射性炭素年代測定と植物種同定	111
第3節 伊坂窯跡の燃料材の放射性炭素年代測定	119
第4節 伊坂遺跡出土石杵付着赤色顔料の蛍光X線分析	123
第Ⅵ章 調査のまとめと考察	126
第1節 伊坂窯の操業時期	126
第2節 伊坂窯跡出土瓦の特徴	130
第3節 伊坂窯製品の供給先	136
第4節 伊坂遺跡の遺構の変遷	139
第5節 伊坂遺跡古墳時代前期集落の構造	141
第6節 伊坂遺跡出土の石杵について	143
第7節 総括	144

## 図版目次

<b>第Ⅰ章 前言</b>	
第1図 新名神路線上遺跡位置図	3
第2図 伊坂窯跡・伊坂遺跡調査区位置図	5
<b>第Ⅱ章 位置と周辺の環境</b>	
第3図 伊坂窯跡・伊坂遺跡位置図	9
第4図 鈴鹿山地東麓の地形	9
第5図 伊坂窯跡・伊坂遺跡周辺の地形分類図	10
第6図 遺跡分布図	12
<b>第Ⅲ章 伊坂窯跡</b>	
第7図 調査前周辺地形測量図	14
第8図 調査区地区割図	15
第9図 造構全体図	16
第10図 1次窯体平面図・立面図	18
第11図 窯体横断土層断面図①	20
第12図 窯体横断土層断面図②	21
第13図 窯体縱断土層断面図	22・23
第14図 1・II次窯体床面遺物出土状況図	25
第15図 最終窯体平面図・立面図	28・29
第16図 灰原横断土層断面図	32
第17図 窯体変遷過程模式図	34
第18図 窯体被熱状況	35
第19図 窯体側壁改変確認箇所	36
第20図 作業場間道造構平面図	40
第21図 作業場間道構土層断面図	41
第22図 伊坂窯跡出土遺物実測図①	44
第23図 伊坂窯跡出土遺物実測図②	46
第24図 伊坂窯平瓦の観察項目と諸型式の設定	48
第25図 伊坂窯跡出土遺物実測図③	51
第26図 伊坂窯跡出土遺物実測図④	52
第27図 伊坂窯跡出土遺物実測図⑤	53
第28図 伊坂窯跡出土遺物実測図⑥	54
第29図 伊坂窯跡出土遺物実測図⑦	55
第30図 伊坂窯跡出土遺物実測図⑧	56
第31図 伊坂窯跡出土遺物実測図⑨	57
第32図 伊坂窯跡出土遺物実測図⑩	58
第33図 伊坂窯跡出土遺物実測図⑪	59
第34図 伊坂窯跡出土遺物実測図⑫	60
第35図 伊坂窯跡出土遺物実測図⑬	61
第36図 伊坂窯跡出土遺物実測図⑭	62
第37図 伊坂窯跡出土遺物実測図⑮	63
第38図 伊坂窯跡出土遺物実測図⑯	64
第39図 伊坂窯跡出土遺物実測図⑰	65
第40図 伊坂窯跡出土遺物実測図⑱	66
第41図 伊坂窯跡出土遺物実測図⑲	67
第42図 伊坂窯跡出土遺物実測図⑳	68
第43図 伊坂窯跡出土遺物実測図㉑	69
第44図 伊坂窯跡出土遺物実測図㉒	70
第45図 伊坂窯跡出土遺物実測図㉓	71
第46図 伊坂窯跡出土遺物実測図㉔	72
第47図 伊坂窯跡出土遺物実測図㉕	73
第48図 伊坂窯跡出土遺物実測図㉖	74
第49図 伊坂窯跡出土遺物実測図㉗	75
第50図 伊坂窯跡出土遺物実測図㉘	76
第51図 伊坂窯跡出土遺物実測図㉙	77
第52図 伊坂窯跡出土遺物実測図㉚	79
第53図 伊坂窯跡出土遺物実測図㉛	80
第54図 伊坂窯跡出土遺物実測図㉜	81
第55図 伊坂窯跡出土遺物実測図㉝	82
第56図 伊坂窯跡出土遺物実測図㉞	83
第57図 伊坂窯跡出土遺物実測図㉟	84
第58図 伊坂窯跡出土遺物実測図㉟	85
第59図 伊坂窯跡出土遺物実測図㉟	86
第60図 伊坂窯跡出土遺物実測図㉟	87
第61図 伊坂窯跡出土遺物実測図㉟	88
第62図 伊坂窯跡出土遺物実測図㉟	89
第63図 伊坂窯跡出土遺物実測図㉟	90
第64図 伊坂窯跡出土遺物実測図㉟	91
第65図 伊坂窯跡出土遺物実測図㉟	92
第66図 伊坂窯跡出土遺物実測図㉟	93
第67図 伊坂窯跡出土遺物実測図㉟	94
第68図 伊坂窯跡出土遺物実測図㉟	95
<b>第Ⅳ章 伊坂遺跡（第5次）</b>	
第69図 大地区割図	98
第70図 造構平面図	99
第71図 S H507平面図・断面図	101
第72図 S H509・512平面図・断面図	102

第73図	S B508平面図・断面図	103	第83図	分析対象資料および赤色顔料生物顕微鏡写真	124
第74図	S B511・S K513平面図・断面図	104	第84図	赤色顔料の蛍光X線分析結果	125
第75図	伊坂遺跡出土遺物実測図	106			
<b>第V章 自然科学分析</b>					
第76図	試料採取位置図	109	第85図	須恵器環口径分布	126
第77図	炭化材（1）	114	第86図	伊坂窯平瓦諸型式の消長	131
第78図	炭化材（2）	115	第87図	伊坂窯平瓦諸型式にみる断面厚の統計値	131
第79図	炭化材（3）・炭化植物遺体	116	第88図	古代寺院・瓦焼成窯分布図	138
第80図	暦年較正結果	121	第89図	伊坂遺跡全体図	140
第81図	S F413出土試料の層年代の分布	121	第90図	古墳時代前期構配図	142
第82図	放射性炭素年代測定試料	122			

## 表目次

第1表	近畿自動車道名古屋神戸線（四日市JCT～亀山西JCT）埋蔵文化財発掘調査経過表	(燃料材).....	120		
	.....	.....	.....		
	.....	.....	.....		
第2表	土層断面図土層対照表	4	第9表	伊坂窯跡周辺古代寺院一覧	137
第3表	試料採取位置対照表	24	第10表	伊坂窯跡周辺瓦焼成窯一覧	137
第4表	放射性炭素年代測定および暦年較正結果 (草本植物)	109	第11表	伊坂窯跡構造一覧表	146
第5表	樹種同定結果	112	第12表	伊坂遺跡構造一覧表	146
第6表	検出位置別の種類構成	113	第13～17表	伊坂窯跡出土遺物一覧表（土器・石製品）①～⑤	147～151
第7表	測定試料及び処理	117	第18～30表	伊坂窯跡出土遺物一覧表（瓦）①～⑩	152～164
第8表	放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果	119	第31表	伊坂遺跡出土遺物一覧表	165

## 写真図版目次

卷頭図版1	伊坂窯跡①	最終窯体煙道部床面縦断断ち割り（南西から）
1次窯体		最終窯体奥壁縦断断ち割り（南西から）
卷頭図版2	伊坂窯跡②	灰原縦断土層断面（東から）
最終窯体		最終窯体煙道部天井検出状況（南から）
卷頭図版3	伊坂窯跡③	最終窯体煙道部天井縦断断ち割り（南西から）
調査区全景	（南西から）	卷頭図版5 伊坂窯跡⑤
最終窯体半截状況		燃焼部西側壁被熱状況
遺構全景	（上空から）	西袖横断断ち割り（南から）
出土平瓦		1-Ⅱ 次窯体焼成部床面縦断断ち割り（南西から）
卷頭図版4	伊坂窯跡④	西側壁改修痕跡段
1-Ⅱ 次窯体焼成部床面被熱状況（東から）		

東側壁改修痕跡段	見学会	
卷頭図版 6 伊坂窯跡⑥	作業場関連遺構	
西側壁改修痕跡段ち割り	写真図版 6 伊坂窯跡出土遺物①……………	173
東側壁改修痕跡段ち割り	写真図版 7 伊坂窯跡出土遺物②……………	174
焼成部西側壁断ち割り	写真図版 8 伊坂窯跡出土遺物③……………	175
焼成部東側壁断ち割り	写真図版 9 伊坂窯跡出土遺物④……………	176
卷頭図版 7 伊坂遺跡①	写真図版10 伊坂窯跡出土遺物⑤……………	177
伊坂遺跡遠景（北西上空から）	写真図版11 伊坂窯跡出土遺物⑥……………	178
S H507（北から）	写真図版12 伊坂窯跡出土遺物⑦……………	179
S B508（北東から）	写真図版13 伊坂窯跡出土遺物⑧……………	180
卷頭図版 8 伊坂遺跡②	写真図版14 伊坂窯跡出土遺物⑨……………	181
S H509出土石杵	写真図版15 伊坂窯跡出土遺物⑩……………	182
S H509出土石杵赤色顔料付着部分	写真図版16 伊坂窯跡出土遺物⑪……………	183
写真図版 1 伊坂窯跡①……………	写真図版17 伊坂窯跡出土遺物⑫……………	184
調査区遠景（南東から）	写真図版18 伊坂窯跡出土遺物⑬……………	185
1 - II 次窯体	写真図版19 伊坂窯跡出土遺物⑭……………	186
写真図版 2 伊坂窯跡②……………	写真図版20 伊坂窯跡出土遺物⑮……………	187
1 - II 次窯体炭化物層除去状況	写真図版21 伊坂遺跡①……………	188
最終窯体燃焼部付近横断ち割り（1次窯体	S H507（西から）	
炭化物層部分）	S H507（北から）	
1次窯体床面上遺物出土状況	写真図版22 伊坂遺跡②……………	189
最終窯体	S H509（東から）	
写真図版 3 伊坂窯跡③……………	S H509（南から）	
最終窯体煙道部	写真図版23 伊坂遺跡③……………	190
排煙口付近土坑断土層	S H512（南から）	
最終窯体燃焼部付近断土層	S H507・512（西から）	
東側壁改修痕跡段	写真図版24 伊坂遺跡④……………	191
写真図版 4 伊坂窯跡④……………	S B508（北から）	
焚口東袖付加状況	S B508・S H509（南東から）	
焚口西袖付近横断土層	写真図版25 伊坂遺跡⑤……………	192
焚口ビット検出状況	S B511（北東から）	
前庭部東側横断土層	S B511（南東から）	
抽部瓦貼り付け状況	写真図版26 伊坂遺跡⑥……………	193
写真図版 5 伊坂窯跡⑤……………	S K513（南から）	
S K410土層	調査区全景（北西から）	
S K410遺物出土状況	写真図版27 伊坂遺跡出土遺物①……………	194
S D412	写真図版28 伊坂遺跡出土遺物②……………	195

# 第Ⅰ章 前言

## 第1節 原因事業の概要

### ①近畿自動車道名古屋神戸線の概要

近畿自動車道名古屋神戸線（以下、新名神高速道路）は、名古屋市と神戸市を結ぶ総延長約175kmの高規格幹線道路である。過去には「第二名神高速道路」などの名称が使用されたこともあったが、平成19年4月23日に、正式に「新名神高速道路」の名称が使用されることとなった<sup>1)</sup>。

新名神高速道路は、交通量の増加に伴い慢性的な交通渋滞に悩まされている名神高速道路の代替路線として、また、昭和62年に策定された「第四次全国総合開発計画」で提唱されている「交流ネットワーク構想」を実現するための根幹路線として、建設が進められている。

三重県内においては、すでに平成14年3月24日に湾岸弥富IC～みえ川越IC間（8.3km）が供用され、翌平成15年3月21日には、みえ川越IC～四日市JCT間（6.2km）が供用されている。供用されたこれらの区間から愛知県の豊田JCTまで、「伊勢湾岸自動車道」とも呼称する。

### ②建設事業の見直しと再開

平成15年の伊勢湾岸自動車道の供用は、新名神高速道路建設事業の一応の区切りであったが、この間、高速道路建設を取り巻く状況は、大きく変化した。長引く不況や、それに伴う国の財政状況の悪化などを背景に、公共事業の見直しや、道路関係四公団を始めとする特殊法人の民営化を求める世論が高まりを見せ、国の道路政策にも大きな影響を与えるようになっていた。平成14年8月30日には、道路関係四公団民営化推進委員会から、「高速自動車国道の施行命令の全面執行について、凍結・規格の見直し」を求める意見書が政府に提出された。その後、軒余曲折を経て、平成16年6月に、いわゆる道路関係四公団民営化関係四法が成立し、日本道路公団は分社・民営化された。これら一連の改革に伴い、新名神高

速道路についても一部抜本的見直し区間が設けられるなど事業の見直しが進められた。

しかし、四日市JCT～亀山西（仮称、以下同）JCT間（27.8km）については、すでに供用された伊勢湾岸自動車道の接続によって東名阪自動車道の交通量が増加し、渋滞が発生するようになっていたことに加え、平成20年に供用が予定されていた、新名神高速道路草津JCT～亀山JCT間の接続で、さらに渋滞の悪化が必至となったことから、早期着工・建設を求める強い要望が各方面から寄せられていた<sup>2)</sup>。

このような中、平成18年2月7日に開催された第2回国土開発幹線自動車道建設会議では、必要性・採算性・費用対効果等を総合的に判断し、新名神高速道路四日市JCT～亀山（当時、以下同）JCT間の整備が決定された。その後、同年3月31日に国土交通大臣より事業許可が下され、建設事業が再開されることになった。（勝山孝文）

### 註

1) 「高速自動車国道法」による路線名及び「国土開発幹線自動車道建設法」による予定路線名は、従来通り、「近畿自動車道名古屋神戸線」を使用している。なお、沿線自治体で組織する第二名神自動車道建設促進協議会によって決定された愛称は、「畿央まほろばハイウェイ」である。

2) たとえば、三重県議会は平成17年6月に、『第二名神高速道路の全線整備を求める意見書』を可決し、衆議院議長・内閣総理大臣・財務大臣・国土交通大臣に提出している。また、三重県商工会議所連合会は、平成17年10月に『第二名神高速道路の早期完成』を求める要望を提出している。

## 第2節 調査に至る経緯

### ①保護協議

昭和63年1月に建設省（当時）より三重県教育委員会に対し、埋蔵文化財に関する照会が行われ、その後、路線上に所在する埋蔵文化財の発掘調査が、平成9～13年度まで行われている。これら、平成13年度までの調査成果および、一連の保護協議の内容については、三重県埋蔵文化財センター発行の既刊報告書<sup>1)</sup>に詳述されているので、ここでは事業再開後の協議の概要と経緯について記述する。

平成18年3月の事業再開を受けて、同年8月に、三重県埋蔵文化財センター・三重県教育委員会文化財保護室・三重県土整備部高速道推進北勢プロジェクト・中日本高速道路株式会社の四者で埋蔵文化財に関する保護協議（以下、四者協議）を行った。その結果、新しい事業計画に基づいて、改めて、詳細な埋蔵文化財分布調査を実施する必要のあることが確認された。これを受けて、三重県埋蔵文化財センターは、平成19年2月、四日市JCT～菰野IC間の詳細分布調査を行った。その結果、計画路線上に新発見の1遺跡を含め、16遺跡の存在を確認した（第1図・第1表No.1～16）。この結果は、「近畿自動車道名古屋神戸線（第二名神）四日市JCT～菰野IC建設予定地内埋蔵文化財一覧Ⅲ」として、同年3月に関係機関に報告している。同年4月、報告結果を受けて、四者協議が行われた。協議の結果、現状保存が困難な遺跡については事前に発掘調査を実施し、記録保存を図ることが決定された。

さらに、同年11月、三重県埋蔵文化財センターは、菰野IC～亀山JCT間の詳細分布調査を行い、路線上に4遺跡の存在を確認した（第1図・第1表のNo.17～20）。この結果は「近畿自動車道名古屋神戸線（第二名神）菰野IC～亀山JCT建設予定地内埋蔵文化財一覧Ⅳ」として関係機関に報告している。これらの遺跡についても、先の協議結果と同様に、記録保存の措置がとられることとなった。

その後、三重県教育委員会と中日本高速道路株式会社名古屋支社四日市工事事務所は、平成21年2月24日付で、事業地内に存在する埋蔵文化財の取扱い

及び発掘調査の実施方法について、「近畿自動車道名古屋神戸線（四日市JCT～亀山西JCT）の建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の実施に関する協定書」を締結した。路線上の遺跡は、この協定書に従い、今後も適切な保護措置をとることとなっている。

### ②事業に伴う発掘調査

四者協議の結果、用地買収の状況、工事スケジュール等の関係から、四日市JCTループ内の遺跡の発掘調査を最優先に行なうことが決定された。この決定に基づいて、平成20～21年度に、以下の遺跡の発掘調査を行った。

#### 〔平成20年度〕

##### 伊坂窯跡（旧：伊坂遺跡東地区②）

期間：平成20年12月17日～平成21年3月13日

面積：558m<sup>2</sup>

##### 伊坂遺跡（平成20年度第1次）

期間：平成21年3月16日～3月19日

面積：42m<sup>2</sup>

#### 〔平成21年度〕

##### 伊坂遺跡（第5次）

期間：平成21年6月8日～12月9日

面積：2,870m<sup>2</sup>

##### 伊坂城跡（第3次）

期間：平成21年7月29日～平成22年1月29日

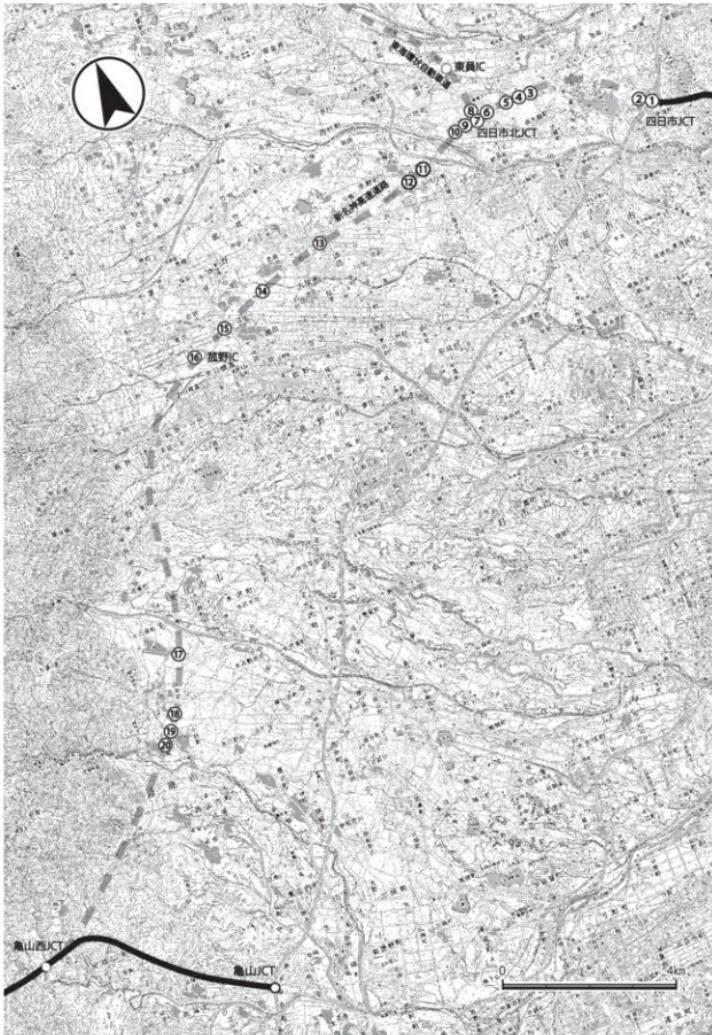
面積：4,490m<sup>2</sup>

また、平成21年10月1日には、調査業務の拠点として、埋蔵文化財センター四日市整理所を四日市市伊坂町126-1に開設した。調査担当職員が駐在し、現地調査や整理作業等の業務を行っている。

### ③普及公開活動

発掘調査の成果について、広く一般の方に知って頂くために、各遺跡とともに、様々な形態で普及公開活動を行った。

伊坂窯跡では、平成21年3月3日に、地元住民と小学校の児童を招いて、遺跡見学会を開催した。出土した瓦や被熱した窯体内部の様子などを間近で観察して頂いた。



第1図 新名神路線上遺跡位置図（1：100,000）

※遺跡番号は第1表と対応

表第1 表近畿自動車道名古屋神戸線（四日市JCT～鶴山西JCT）埋蔵文化財発掘調査

伊坂遺跡では、平成21年11月22日に、地元自治会の主催する「ふれあいフェスタ・歴史ウォーキング」の一環として、ウォーキング参加者に現地を公開した。約100名の方に堅穴住居などの遺構を実際に見て頂き、解説を行った。

また、平成22年3月に、調査成果を速報する発掘調査ニュース「新あさけのいにしへ」No.1を発行した。さらに、平成22年7月には、『埋蔵文化財発掘調査概報1 伊坂窯跡・伊坂遺跡(第5次)・伊坂城跡(第3次)』を発刊している。(勝山孝文)

#### 註

- 1) 第二名神建設事業(当時)に伴う埋蔵文化財発掘調

査報告書は、以下のとおり。

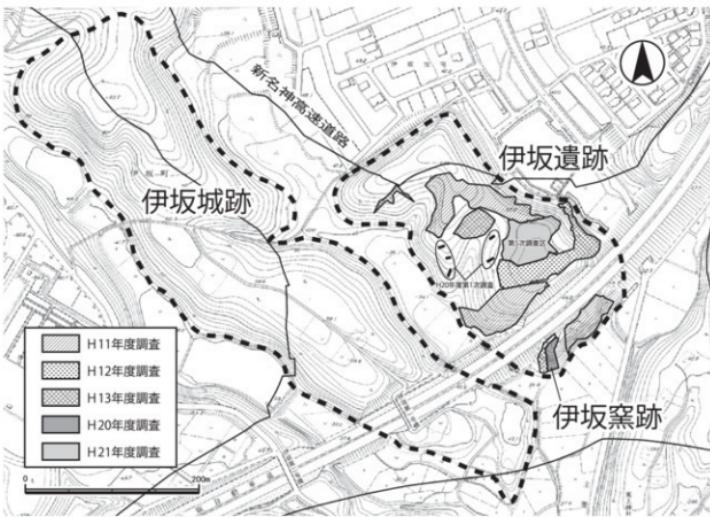
- 三重県埋蔵文化財センター『金坂遺跡・金坂横穴墓群・山村遺跡発掘調査報告』2002、三重県埋蔵文化財センター『伊坂城跡発掘調査報告』2003、三重県埋蔵文化財センター『城ノ谷遺跡発掘調査報告』2004、三重県埋蔵文化財センター『伊坂遺跡発掘調査報告』2004、三重県埋蔵文化財センター『重石遺跡発掘調査報告』2004、三重県埋蔵文化財センター『辻子遺跡発掘調査報告』2004、三重県埋蔵文化財センター『菟上遺跡発掘調査報告』2005、三重県埋蔵文化財センター『広永横穴墓群・広永1号墳・広永城跡・広永遺跡発掘調査報告』2006、三重県埋蔵文化財センター『西ヶ広遺跡(第3次・4次)発掘調査報告』2006。

### 第3節 伊坂遺跡の調査次数と窯跡の名称について

**第1次～第3次調査** 伊坂遺跡は、第二名神高速道路(当時)の建設事業に伴い、平成11年度に第1次調査が行われ、それ以降、平成12年度に第2次調査、平成13年度に第3次調査が行われている(第2図)。第1次～第3次までの発掘調査の成果は、報告書と

して1冊にまとめられ、平成16年3月に刊行されている<sup>1)</sup>。その後、高速道路建設事業は、見直しのため一旦凍結された。

**第4次調査(伊坂窯跡)** 高速道路建設事業の再開に伴い、平成20年度に、四日市JCTループ内の橋梁設置



第2図 伊坂窯跡・伊坂遺跡調査区位置図(1:5,000)

工事箇所（558m<sup>2</sup>）を「東地区②」と設定し、第4次調査を行った。

調査の結果、「東地区②」からは、古代の窯跡とそれに伴う遺物を多数確認することができた。詳細は第Ⅲ章で報告している。

しかしながら、窯跡関連の遺構・遺物しか検出されなかつたこと、および、古墳や窯跡については、個別に遺跡番号を付与することが通例であることから、「伊坂遺跡東地区②」を、「伊坂窯跡」と命名し、新発見の遺跡として遺跡登録を行つた。以上のような経緯から、伊坂遺跡第4次調査は、本書において「伊坂窯跡」として報告している。

**第5次調査** 平成21年度に入り、路線内および、路線外ではあるが、工事の関係上、掘削による破壊が

避けられない部分を合わせて、2,870m<sup>2</sup>の発掘調査を行つた。この調査を本書では、「第5次調査」として報告している。

**平成20年度第1次調査** 平成21年3月16日～19日にかけて、次年度に予定されていた第5次調査に向けての先行調査を行つてゐる。この調査では、遺構・遺物が認められなかつたことに加え、調査面積が42m<sup>2</sup>と狭小であったことから、全体の調査次数にはカウントせず、「平成20年度第1次調査」として、調査位置を、本書の第2図に掲載した。（勝山孝文）

#### 註

- 1) 三重県埋蔵文化財センター『伊坂遺跡発掘調査報告』  
2004。

## 第4節 文化財保護法等にかかる諸通知

伊坂窯跡と伊坂遺跡の発掘調査の法規上の手続きは以下の通りである。なお、伊坂窯跡については、新発見の遺跡登録以前は、「伊坂遺跡東地区②」として手続きを行つてゐる。

### 【伊坂窯跡】

○文化財保護法第94条に基づく三重県文化財保護条例第48条第1項（土木工事等のための発掘に関する通知）

・平成20年6月24日付け、中高名支建第542号（県教育長あて中日本高速道路株式会社名古屋支社長通知）

○文化財保護法第99条第1項（発掘調査の着手報告）

・平成21年1月5日付け、教理第374号（県教育長あて三重県埋蔵文化財センター所長報告）

○文化財保護法第100条第2項（文化財の発見・認定通知）

・平成21年3月25日付け、教委第12-4433号（四日市北警察署長あて県教育長通知）

○文化財保護法第97条第1項（遺跡の発見通知：伊

### 坂窯跡）

・平成21年3月24日付け、教理第514号（県教育長あて三重県埋蔵文化財センター所長通知）

### 【伊坂遺跡第5次】

○文化財保護法第94条に基づく三重県文化財保護条例第48条第1項（土木工事等のための発掘に関する通知）

・平成21年5月15日付け、中高名支工第213号（県教育長あて中日本高速道路株式会社名古屋支社四日市工事事務所長通知）

○文化財保護法第99条第1項（発掘調査の着手報告）

・平成21年6月9日付け、教理第118号（県教育長あて三重県埋蔵文化財センター所長報告）

○文化財保護法第100条第2項（文化財の発見・認定通知）

・平成21年12月21日付け、教委第12-4414号（四日市北警察署長あて県教育長通知）

（勝山孝文）

## 第5節 調査の経過

### 【伊坂窯跡】

調査期間は、平成20年12月17日～平成21年3月17日である。

高速道路に隣接していることに加え、周辺に光

ファイバーケーブルが埋設されている可能性があつたため、様々な手続きを行う必要があつた。そのため、表土掘削を開始するまでに1ヶ月ほどの期間を要した。

調査進行の概略は、以下の調査日誌(抄)の通りである。

＜調査日誌(抄)＞

平成21年

- 1月 6日 C区の機械掘削。盛土厚が1mを越えるため掘削中止。C区の調査終了。
- 7日 A区の表土掘削開始。
- 13日 A区の表土掘削完了。
- B区の表土掘削開始。
- 19日 B区のF18・G18グリッドより瓦が大量に出土。
- 23日 B区の表土掘削完了。
- 27日 B区の遺構検出開始。  
灰原のような炭化物層が厚く堆積。
- 29日 窯体(S F413)検出。
- 2月 2日 窯体掘削開始。
- 5日 窯尻付近で土坑検出。
- 6日 焚口西袖を確認。瓦で補強されている。  
焼造完掘。段状に整形し、平瓦を並べて置き、さらに粘土を貼っている。  
窯体西半完掘。
- 9日 窯体完掘。立面図等作成(～13日)。
- 16日 床面断ち割り。下から1次窯体を検出。  
地山を段状に削り出して成形している。
- 17日 最終窯体煙道の下の1次床面直上に須恵器壺1点(口縁一部箇所打ち欠き)が伏せて置かれていた。
- 3月 2日 最終窯体・2次窯体煙道完全に除去。  
最終窯体煙道床面は瓦2枚を重ねて埋め込んでいる。
- 3日 地元の八郷小学校6年生と伊坂自治会を対象とした現地説明会を行う。合計130名の参加者を得た。
- 4日 奥壁部分の精査。1次窯体の奥壁検出。  
立面図等作成(～10日)。
- 11日 窯体・床面断ち割り開始。図面作成(～16日)。
- 17日 調査終了。現地引き渡し。

【伊坂遺跡】

調査期間は、平成21年6月8日～平成21年12月9日である。

調査区が高速道路ループ内ということに加え、周辺に光ファイバーケーブルが埋設されている可能性があったため、伊坂窯跡と同様に、種々の手続きを行いう必要があった。そのため、表土掘削を開始するまでに1ヶ月以上の期間を要した。

調査進行の概略は、以下の調査日誌(抄)の通りである。

＜調査日誌(抄)＞

平成21年

- 7月 28日 重機による盛土部分の撤去開始。
- 31日 盛土の撤去が進むにつれ、調査区中央部は削平されていることが、明らかになってきた。
- 8月 4日 盛土撤去完了。
- 5日 東側斜面より重機による表土掘削開始。
- 17日 調査区西端で土師器高环脚部出土(のち検出作業後にS H509を確認)。
- 20日 表土掘削完了。
- 24日 高速道路ループ内のため、保護シートが使用できず、すでに検出面は乾燥して硬化している。散水の準備が整うまでも、東側斜面の人力による遺構検出を行う。
- 28日 西側斜面の遺構検出。
- 31日 500ℓのタンクを2基設置。散水しながら、南東部より北に向かって、平坦面の検出を開始。
- 9月 1日 調査区南東部に堅穴住居跡(S H507)を検出。北側半分は削平されている。
- 7日 S H507の掘削完了。主柱穴、貯蔵穴を確認。
- 8日 調査区中央部の検出。遺構らしきものなし。
- 10日 調査区西側の検出開始。M25グリッドで柱穴を4つ検出。周囲は削平されているため壁周溝は確認できないが、おそらく堅穴住居と思われる。
- 14日 M25グリッドの柱穴の周囲を再検出。柱穴を複数確認。2×3の掘立柱建物であることが分かった(S B508)。
- 16日 K22グリッドで堅穴住居(S H509)を確認。北西部部分は斜面に崩落しており残存

- せず。
- 18日 S H509完掘。壁周溝、主柱穴、壁柱穴を確認。
- 24日 調査区北西部で $2 \times 3$ の掘立柱建物（S B511）を確認。
- 29日 S B508の周辺をさらに精査。南東側にさらに1間のび、 $3 \times 3$ となることが判明。  
S H507も再度精査したところ、南壁と西壁に壁柱穴を確認。ただし、東壁では確認できなかった。
- 10月 1日 遺構検出・遺構掘削終了。午後より各遺構ごとに写真撮影（～13日）。
- 14日 遺構実測開始（～19日）。
- 20日 遺構レベル測量開始（～23日）
- 27日 平板による斜面の測量開始。
- 28日 現場作業終了。
- 11月 5日 ラジコンヘリによる空中写真撮影。
- 22日 八郷ふれあいフェスタ現地見学会。約100名の参加者を得た。

（勝山孝文）

## 第Ⅱ章 位置と周辺の環境

### 第1節 地理的環境

#### ①地形と地質

伊坂窯跡・伊坂遺跡は三重県の北勢地方、四日市市伊坂町に所在する（第3図）。その北勢地方はいわゆる近畿三角帯の東縁に位置し、西を鈴鹿・養老山地、東を伊勢湾によって囲まれている。鈴鹿山地からは員弁川・朝明川・三流域などの河川が伊勢湾に向かって注ぎ込んでいる。

巨視的にみれば、当地は西高東低の地形をなしているが、南北を貫く一志断層および桑名・四日市断層の活動によって、一般的な臨海平野とは異なった地形配列をみせている（第4図）。鈴鹿山地東麓の一志断層は、断層西側が衝上する逆断層であり、山地西麓（滋賀県側）よりも急峻な斜面を形成している。一方、桑名・四日市断層は第四紀後半に度々活動が認められている断層で、平野の沈降および丘陵の隆起をもたらした。このため、一志断層以西の山地と、桑名・四日市断層以東の海岸平野に挟まれた地域では、更新世段丘とその開析谷（谷底平野）が形成され、さらに段丘東端に丘陵が残されるという、当地の特徴的な地形配列が形成されたのである<sup>1)</sup>。

さて、これらの地形域を個別にみると、鈴鹿・養

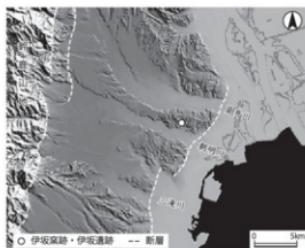
老の山地域は、丹波帯・美濃帯からなり、関ヶ原から沿津市南濃では砂岩、壱仙山から蘿原岳周辺は綠色岩類やチャート・石灰岩、石楠岬以南は砂岩類が卓越する<sup>2)</sup>。このうち、綠色岩類には火山碎屑岩の一種であるハイアロクラスターが含まれ、いなべ市宮山遺跡、四日市市茎上遺跡など、弥生時代における磨製石斧生産の前提条件として注目される。

北勢地方の丘陵は、奄芸層群とよばれる淡水性の湖底堆積物で、第三紀における東海潮の形成に伴うものである。この丘陵は伊坂ダム北方の101mを最高点としており、土位段丘面がより高所にみられることがある。丘陵の湖成粘土層は、窯業の展開と密接に関わっており、四日市市域には丘陵に総数18基の古窯が知られている<sup>3)</sup>。今回調査した伊坂窯跡も、このような古窯のひとつである（第5図）。

段丘面は朝明川・員弁川等に起因する扇状地性の堆積面で、更新世に段丘化したものである。これらの段丘面と現河道・谷底平野との間には明瞭な段丘崖がみられ、土地利用上の境界となっている。伊坂遺跡の周辺では、更新世の低位段丘および完新世段丘上に遺跡が集中しており、朝明川の氾濫を避けられる安定した土地を選んでいたと推測されるが、このような集落の立地は、近現代に至るまで大きく変わっていない。



第3図 伊坂窯跡・伊坂遺跡位置図 (1:1,800,000)



第4図 鈴鹿山地東麓の地形 (1:500,000)  
※国土地理院数値地図50mメッシュより作成

平野面は朝明川低地などの谷底平野と、桑名・四日市断層の東側に広がる海岸平野からなる。完新世の河川堆積は必ずしも平野全面に及んでいないが、これは丘陵が下流側への堆積を遮り、かつ海岸平野が、海退とともに nau 海成層の陸化によって形成されたためである<sup>4)</sup>。

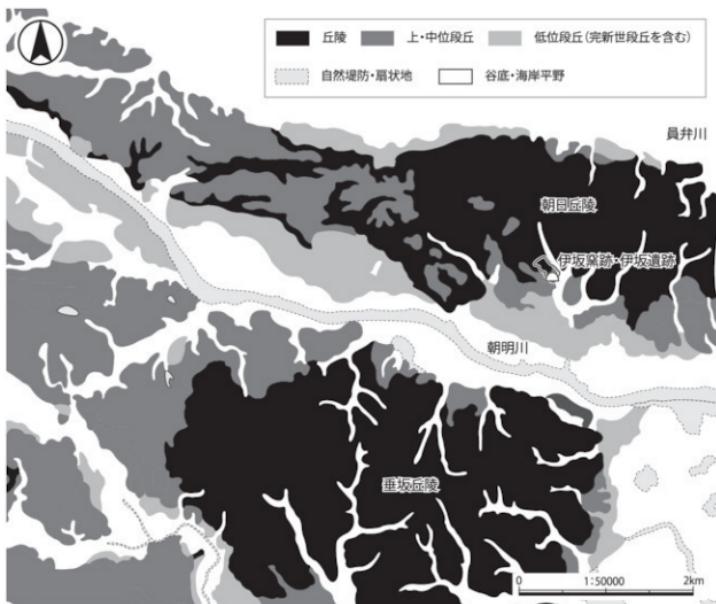
## ②伊坂窯跡・伊坂遺跡周辺の地形

鈴鹿山地の駿河ヶ谷に端を発する朝明川は、段丘や丘陵を開析しながら狭隘な谷底平野を形成し、朝明川の両岸にある朝日丘陵・垂坂丘陵が、地形に起伏を与えていている。谷底平野は丘陵の東限である四日市市広永・大矢知付近で大きく開け、海岸平野に変わっている。

伊坂窯跡・伊坂遺跡は朝明川の左岸、朝日丘陵南

端の低平な舌状の小丘陵に位置する（第5図）。この小丘陵は標高約150m、頂部と周辺低地との比高差は約30mを測る。遺跡の東西は谷地形で、小丘陵のこの小文谷より南側の平坦地が伊坂窯跡、小丘陵の南側斜面が伊坂窯跡の所在地である。四日市古窯跡群では丘陵の南側斜面を利用する例が多いが、伊坂窯跡もまた日当たりがよく、防湿に適した場所を選地しているのであろう。

現在、伊坂遺跡の北方は住宅地と化したが、かつては小丘陵東側の谷筋が、朝日丘陵を横断して伊坂村と赤尾村（桑名市）を結び、員弁川や多度へ至る生活道となっていた。四日市市伊坂町周辺における近世以降の集落は、谷と低地の合流点付近を選地しており、伊坂窯跡や伊坂城跡の立地もまた、このような交通上の利便性が関係しているのではないかと



第5図 伊坂窯跡・伊坂遺跡周辺の地形分類図（1:50,000）  
※吉田敏弘1995より一部改変してトレス、四日市市域のみ図化

推測される。

(櫻井拓馬)

図解説書』 2003。

#### 註

- 1) 太田陽子ほか(編)『日本の地形6 近畿・中国・四国』 東京大学出版会 2004。
- 2) 近畿地方土木地質図編纂委員会『近畿地方土木地質

3) 山沢義貴「四日市市域の古窯」「四日市市史」第3巻史料編考古Ⅱ 四日市市 1993。

4) 吉田敏弘「四日市市の地理的位置と地形条件」「四日市市史」第16巻通史編古代中世 四日市市 1995。

## 第2節 歴史的環境

伊坂窯跡・伊坂遺跡は、古代の郡制でいう朝明郡に位置する。その朝明郡は北を桑名・員弁郡、南は海藏川を境に三重郡と接し、東西に細長い郡域の中央を朝明川が流れる。

朝明郡域では、丘陵の先端や低平な更新世段丘面に遺跡が集中しており、特に、①朝日丘陵南側、②四日市市西大鏡町以西の段丘面、③垂坂丘陵南東の3ヶ所に分布の核を認めることができる(第6図)。一方、平野部は周知遺跡が希薄で、谷底平野が海岸平野へと拓ける広永町・大矢知町周辺などに遺跡が知られているに過ぎない。このような状況は、員弁川沿いの沖積平野に遺跡が多い桑名郡域とは対照的であり、朝明郡の地理的・歴史的な特徴がよく表れているといえよう。

ここでは、比較的調査例の多いこの3地域を中心には、時代をおって遺跡の展開をみていきたい。

### ①旧石器～縄文時代

旧石器～縄文時代の遺跡は、いなべ市域の段丘面や四日市市水沢周辺、菰野町域に集中しているが、伊坂遺跡の周辺では西ヶ広遺跡<sup>3)</sup>などで縄文時代の遺構・遺物がわずかに確認できるのみである。なお、中位段丘面ではAT層が検出されているので<sup>2)</sup>、今後縄文時代以前の遺跡が増えることを期待したい。

### ②弥生時代

大谷遺跡(四日市市生桑町)・永井遺跡(同尾平町)は、三瀧川流域の生桑丘陵先端に営まれた、弥生時代開始期の代表的な遺跡である。しかしながら、朝明郡では当該期の遺跡は知られておらず、本格的な当地の開発は中期以降のことであるとみられる。

朝日丘陵周辺では、西ヶ広遺跡のほか、120棟ほどの堅穴住居、棟持柱を持つ掘立柱建物、多数の石器・

木製品が確認された菟上遺跡<sup>3)</sup>、方形周溝墓や環濠をもつ山村遺跡<sup>4)</sup>、扁平鉢式銅鐸の出土地であると伝えられる伊坂遺跡が所在しており、立地などから一連の遺跡であると考えられる。金塚遺跡は低地と比較高差60mの丘陵尾根にあり、環濠をもつ高地性集落として注目される遺跡である。住居跡から扁平鉢～突縁鉢式の銅鐸片が出土した<sup>5)</sup>。

垂坂丘陵周辺には、中期後葉～後期の大規模集落である久留倍遺跡<sup>6)</sup>のほか、皮袋形土器や多角形住居など特徴的な遺構・遺物が得られた山奥遺跡<sup>7)</sup>などがある。

平野部の遺跡は不明な点が多いが、下之宮遺跡で中期の土器が数多く得られており、平野部の大規模集落である可能性が指摘されている<sup>8)</sup>。低位段丘の先端から平野部にかけて広がる辻子遺跡では、後期の水田が確認された。食糧生産域を具体的に知ることができた貴重な事例である<sup>9)</sup>。

### ③古墳時代

四日市市大宮町の志氏神社古墳(全長60m)は前期の前方後円墳である。朝明郡域ではその後前方後円墳の築造が一旦途絶えることから、中期には広古墳群B1号墳、浄ヶ坊古墳群1号墳など30m級の円・方墳が首基墓として採用されていたとみられる。

なお、当地域では後期古墳の数が圧倒的に多く、持光寺山・鷲谷古墳群・筆ヶ崎古墳群など後期の群集墳とみられる古墳群が段丘上に展開する。また、当地の特色として、広永<sup>10)</sup>・金塚<sup>11)</sup>・死人谷<sup>12)</sup>など終末期の横穴墓群が複数確認されていることは注目される。このような造墓の動向と合致するように、6世紀以降は集落や遺物散布地の例が急増するが、5世紀以前の集落は調査例が少なく、集落像を明確にしがたい。伊坂遺跡・伊坂城跡では古墳時代前期

の住跡が複数確認された<sup>10</sup>。

#### ④古代

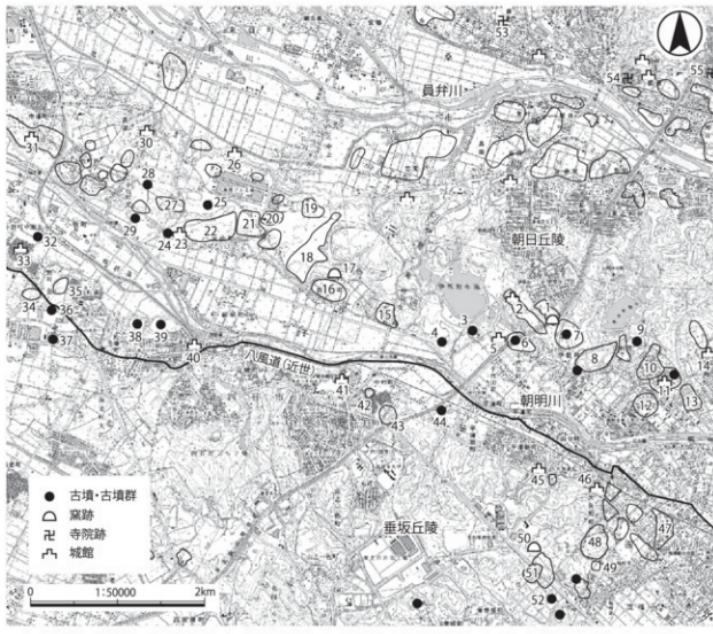
当地域は交通の要衝として文献にたびたび名がみえる。『日本書紀』には、壬申の乱に際して美濃を目指す大海人皇子が、途太川にて天照大神を遙拝したとある。また天平12年(740)、聖武天皇は伊勢行幸の折、朝明に宮している。さらに『延喜式』には、東海道の駅家として朝明駅の名が確認できる。

このような朝明郡の重要性は、式内社の濃密な分布にも現れているとみえ、三重郡6社に対し、朝明郡24社がある。にもかかわらず、古代寺院の分布は

希薄であり、三重郡に智積魔寺、桑名郡に額田庵寺、蓮花寺魔寺などが知られているが、朝明郡では羅生寺、大膳寺跡のほか、西辻遺跡で古瓦が出土しているにすぎない<sup>11</sup>。

朝明郡には、『和名類聚抄』に田光・枝部・大金・豊田・訓嗣の5郷がみえ、正倉院文書に葦田郷が確認できる。このうち大金郷の名は金属器生産に由来するとみられ、四日市市西大鐘町の北山C遺跡・中野山遺跡などでは羽口や鉄滓が得られている<sup>12</sup>。

朝明郡衙は、西ヶ広遺跡がその候補地であったが、久留倍遺跡において区画内に柱建物を整然と配置する正倉が確認され、所在地がほぼ確定した<sup>13</sup>。



1. 伊坂遺跡 2. 伊坂窓跡 3. 津ヶ堺古墳群 4. 広古墳群 5. 西ノ庄城跡 6. 西ノ庄遺跡・山古墳 7. 荘上遺跡  
8. 山古墳 9. 金保遺跡 10. 城ノ谷遺跡 11. 広木城跡 12. 間ノ田遺跡 13. 辻子遺跡 14. 横瀬城跡 15. 無縫遺跡 16. 西辻遺跡  
17. 北ノ山古墳 18. 北山C遺跡 19. 黒土遺跡 20. 野中遺跡 21. 北山人遺跡 22. 中野山遺跡 23. 北山城跡 24. 四林古墳群  
25. 斧ヶ崎古墳群 26. 花屋城跡 27. 小牧人遺跡 28. 若宮古墳群 29. 門ノ上古墳群 30. 善正寺城跡 31. 市場城跡 32. 鶴塚古墳  
33. 中野城跡 34. 中野平古遺跡 35. 小牧南遺跡 36. 山古墳 37. 大矢古墳 38. 持光寺山古墳群 39. 発古古墳群 40. 治山古墳  
41. 貝生城跡 42. 横尻谷中石墓 43. 中村遺跡 44. 八幡古墳 45. 大矢加隈城跡 46. 大矢加隈屋跡 47. 下ノ宮遺跡 48. 久留倍遺跡  
49. 大矢知山畠遺跡 50. 楠浦古窓 51. 山奥遺跡 52. 死人谷根穴墓群 53. 七和寺 54. 鶴田庵寺 55. 蓮花寺魔寺

第6図 遺跡分布図(1:50,000)

※国土地理院発行1:50,000「四日市」に加筆

## ⑤中世

律令国家の行政機構が解体するにしたがい、朝明郡は寛仁元年（1017）に神郡（伊勢神宮領）とされ、宮司や祭主が郡司・郷司などの在地豪族を編成し、その支配にあたった。また、攝宣たちは神郡に御園・御厨をたて、神税や租税免除の特権を得ることによって勢力の拡大をはかった。『神鳳鈔』によれば、朝明郡には御園5・御厨26、納所2が所在したとされる<sup>17</sup>。なお、辻子遺跡では百代寺式の灰釉陶器が大量に出土しており、広永御厨との関わりが指摘されている<sup>18</sup>。

鎌倉時代と南北朝の動乱を経て、室町時代の北勢地方は伊勢守護の管轄するところとなったが、朝明郡周辺は室町幕府の奉公衆である十ヶ所人數や、員弁・朝明の国人衆からなる北方一揆によって実質的に支配されていた。朝明川沿いの段丘には、彼らの城館が数多くみられ、伊坂城跡は北方一揆のひとり、伊坂氏の居城と伝えられている<sup>19</sup>。

このように国人衆が力を持った背景には、朝明が交通の要衝として重視されていたことがあげられる。15・16世紀の北勢における流通の中心は、自由都市「十楽津」と称された桑名であり、陸海の交通を通じて東海地方のさまざまな物資が集まつた。この桑名と近江を結ぶ最短ルートとして注目されたのが、桑名を起点として大矢知・一田光より八風峠を越え、近江八日市に至る八風道である。しかし、永禄10年（1567）の織田信長侵攻によって国人衆の結合は解体を余儀なくされ、国中の城郭は破却、諸閥も撤廃を命じられたという。八風道も、江戸時代の東海道・中山道の整備等によって衰微していった<sup>20</sup>。

## ⑥近世

江戸時代の現四日市市域には天領・大名領・旗本領が複雑に入り組み、領主の変遷がはなはだし。朝明は桑名藩領に属したが、文政6年（1823）、松平忠亮の武蔵移封に伴い忍藩領となり、大矢知に陣屋が置かれた。このため、近世の八風道は年貢米輸送の幹線道となつたという。街道沿いには19世紀の道標や常夜燈が現存し、往事の風景を偲ばせる。

（櫻井拓馬）

## 註

- 1) 三重県埋蔵文化財センター『西ヶ広遺跡（第3・4次）発掘調査報告』 2006.
- 2) 太田陽子ほか（編）『日本の地形6 近畿・中国・四国』 東京大学出版会 2004.
- 3) 三重県埋蔵文化財センター『墓上遺跡発掘調査報告』 2005.
- 4) 三重県埋蔵文化財センター『山村遺跡（第2次）発掘調査報告』 2004.
- 5) 三重県埋蔵文化財センター『金塚遺跡・金塚横穴墓群・山村遺跡発掘調査報告』 2002.
- 6) 四日市市教育委員会『一般国道1号北勢バイパス埋蔵文化財発掘調査概報』V1 2002、四日市市教育委員会『一般国道1号北勢バイパス埋蔵文化財発掘調査概報』V2 2003、四日市市教育委員会『一般国道1号北勢バイパス埋蔵文化財発掘調査概報』V3 2004。
- 7) 四日市市教育委員会『山奥遺跡発掘調査報告Ⅰ』 2003、四日市市教育委員会『山奥遺跡発掘調査報告Ⅱ』 2004。
- 8) 鮎積裕昌『北伊勢の野生集落～四日市市下之宮遺跡とその周辺～』『研究紀要』第13号 三重県埋蔵文化財センター 2003。
- 9) 三重県埋蔵文化財センター『辻子遺跡発掘調査報告』 2004。
- 10) 三重県埋蔵文化財センター『広永横穴墓群・広永1号墳・広永城跡・広永遺跡発掘調査報告』 2006.
- 11) 三重県埋蔵文化財センター2002。
- 12) 四日市市『死人谷横穴古墳群』『四日市市史』第2巻史料編考古I 1988。
- 13) 三重県埋蔵文化財センター『伊坂遺跡発掘調査報告』 2004。
- 14) 八賀晋『地方寺院の成立過程』『四日市市史』第3巻史料編考古II 四日市市 1993。
- 15) 四日市市遺跡調査会『北山C遺跡』 1988、東員町教育委員会『西山遺跡・新野遺跡』 1976。
- 16) 四日市市教育委員会2002・2003・2004。
- 17) 勝山青次『北伊勢と伊勢神宮』『四日市市史』第16巻史編古代中世 四日市市 1995。
- 18) 三重県埋蔵文化財センター2004。
- 19) 三重県埋蔵文化財センター『伊坂城跡発掘調査報告』 2003。
- 20) 三重県教育委員会『歴史の道調査報告書』 1984。